

UFOキャッチャーのアームが、ライオンのぬいぐるみの頭をつかむ。ぬいぐるみの大きさは手の平サイズ。ぬいぐるみの頭をつかんだままアームが上がっていく。もう少しで直立の姿勢になるという瞬間、アームからぬいぐるみだけが離れてしまった。手ぶらになったアームがむなしく元の位置に戻る。

「ダメかー」

思わず声が漏れる。

場所は、ショッピングモールの中にあるゲームセンター。

様々なゲームの音が入り混じっている。

平日の夜九時ということもあって、お客さんの姿はまばらだ。

プリクラのコーナーには、ヤンキーの若いカップル。二人とも金髪でジャージという格好だ。ガチャガチャのコーナーには、スーツ姿の女性。手には食材が詰まった買い物袋を持っている。UFOキャッチャーのコーナーでは、店員がぬいぐるみの位置を調整している。

僕の名前は、宇二有人（うじありと）。大学二年生。

今は、スーパーでのアルバイトを終えて帰宅途中（に寄り道をしているところ）だ。

僕が今いるゲームセンターは、バイト先のスーパーから自転車で十分ぐらいの場所にある。ときどき、バイト終わりに、ふらっと寄ってはUFOキャッチャーをしている。

UFOキャッチャーにハマるようになったのは、一年ほど前から。以来、街なかでUFOキャッチャーを見かけると、ついついプレイするようになってしまった。

今日、取ろうと思っていたのは、オスのライオンのぬいぐるみ。体は黄色で、頭には茶色いフサフサのたてがみがついている。尻尾の先にも茶色いフサフサがついている。

最初は転がして取ろうとしたが失敗。次は、胴体部分をつかもうとしたがうまくいかなかった。それならばと、頭をつかんで取ろうとしたがダメだった。

UFOキャッチャーで遊ぶときには狙った商品に対していくらまでお金を使うか最初に決めていく。そうしなければ、際限なくお金を投入してしまう。ライオンのぬいぐるみに対しては五百円と決めていた。もう少し挑戦したいところだが、今日は、ここまでにしておこう。

とはいえ、このままでは悔しいので、次回は景品をゲットできるよう、家に帰ったら、インターネットでUFOキャッチャーの勉強をすることにしよう。

手に持っていた財布をリュックにしまい、ゲームセンターを後にした。

僕は、大学で「テレスコープ」というサークルに入部している。天体観測をするサークルで、週に一回の活動、長期休み期間に合宿で天体観測をする。週に一回の活動では、長期休みに行く場所や、星や天体の勉強会をおこなっている。ただ、まじめな話より、雑

談している時間の方が長い。「きっちり」というより「ゆるーく」活動するタイプのサークルだ。

僕みたいに毎週出席している部員もいれば、長期休みの天体観測だけ参加する人もいる。部員の数は、一年生から四年生まで合わせて、八人。

入部一年目の十二月、年末最後の活動があった日に忘年会がおこなわれた。場所は、学校の最寄り駅近くにあるチェーン店の居酒屋。参加者は八名ほど。二時間の飲み放題コースだった。

二次会はカラオケということになった。お店に着いたとき、ちょうど部屋が満室だったので、部屋が空くまで十五分ほど待つことに。

お店の入口に小型のUFOキャッチャーが二台置いてあった。景品は世界的に有名なキヤクターのぬいぐるみ。頭の部分にはボールチェーンが付いていて、サイズは手のひらサイズ。

待っている間、僕は、古巣元也（ふるすもとや）、それと、星屋朱里（ほしやあかり）という女の子と一緒にUFOキャッチャーをすることにした。

古巣とは、入学式の時に出会い、それ以来、普段から一緒にご飯を食べたり遊びに行ったりする仲だった。

星屋は明るくて話しやすい子で、表情も豊かでかわいらしい感じ。星屋とは、いくつか同じ授業をとっていて、会うと話をするぐらいの関係だった。

UFOキャッチャーに三人で順番に挑戦をするが、ぬいぐるみはなかなか取れなかった。何度かつかんで持ち上がるが、アームが上がりきったときの振動で落ちてしまう。

当時、僕は、UFOキャッチャーにハマる前だったので狙って取るなんて技術は持っていないかった。

しかし、僕が三回目の挑戦をしたとき、つかんだぬいぐるみが振動で落ちることなく、アームがぬいぐるみを取り出し口まで運んだ。

「お！ よっしゃ！」

「取れた！」

「すごい！」

僕らは達成感に包まれハイタッチをした。汗ばんだの手の平の感覚。高揚した面持ちの古巣と星屋。古谷は目を見開いて興奮していた。星屋の頬はほんのり赤く染まって、目はさらにきらきらしていた。

これが、僕がUFOキャッチャーに目覚めた瞬間だった。

同時に、川口と仲が深まった瞬間でもある。

そして、星屋さんにほのかな恋心を抱いた瞬間だったりもする。

3

バイト先のスーパーの休憩室。

僕の目の前にいるのは、須平光也（すひらこうや）先輩。年齢は僕よりひとつ上。身長が僕よりも十センチほど高く一八〇センチぐらいある。気さくな人柄で誰とでも仲良くなれるタイプの人だ。大学は僕とは違う学校へ通っている。

「へー、宇二君、UFOキャッチャー好きなんだ」

「まあ、よく行くと言っても一、二週間に一回くらいですけどね」

「いや、すげえ多い方だと思うよ」

商品を棚に補充する品出しの仕事をしているのだが、必要な商品をあらかじめ出し終えたので、僕と先輩は控室で小休止をとっていた。

休みの日は何をしているのかという話からUFOキャッチャーの話題になった。

「そうだ、UFOキャッチャーで彼女が欲しい景品あるんだけど全然取れなくてさ。箱物とかどうやって取るの？つかもうとしても重さで持ち上がらないし」

「つかむ以外に取り方があるんです。逆に、普通につかんで取れるものの方が少ないです」

「マジで？いつもつかんで取るうとしてたよ。でも、そしたら、どうやって取るの？」

「転がしたり、少しずつずらしたりします。箱物の場合は少しずつずらして取る方法ですね」

「そうか、いいこと聞いちゃった。今度試してみようっと」

先輩が腕時計を覗ながら「おっ、時間だ。そろそろ戻ろうか」と休憩室を出ていく。僕も後に続いた。

箱物をつかんで取ろうとすると、大抵のアームは力が弱過ぎて完全に持ち上げることができない。しかし、途中までは持ち上がる。途中まで持ち上がった景品がボタンと落ちると位置が少しずれる。このずれを利用して景品を落とす。ずらす方向を右か左に決めて何度も持ちあげ少しずつ動かしていく。動かすときのコツは、真ん中を持つとうしないことだ。例えば、右に動かしていくときには、右のアームを景品の右側ギリギリにくるようにしてつかむ。アームでつかむ位置を計算するためには、開いたときに爪が来る位置を把握しておかなければならない。ほとんどのアームでは、閉じたときのひじの位置が、開いたとき爪が落ちる幅にあたる。もちろん例外はあるが、慣れてくると落としたい位置に爪先をもってこれるようになる。

バイトが終わって、帰る前、以上のような内容を須平先輩に話した。しかし、眉間にしわを寄せ頭の上には「？」マークが浮かんでいた。「動画サイトでコツを解説しているものがありますよ」と言うと、「実際に見た方が分かるかもな。見てみるよ」と頷いていた。

4

「えっ！古巣、彼女できたの？」

「おう」

お昼休み、大学の食堂。三時限目の授業が同じだった僕と古巣は一緒にお昼ご飯を食べていた。

僕はきつねうどん、古巣は唐揚げ丼。窓際のカウンター席に並んで座っている。

週末何をしてたかという話題で「水族館でデートしてきた」という衝撃の内容を聞かされた。おかげで、むせて、うどんの麺が鼻に入ってしまった。

「いつのまに」

「相手はバイト先の塾の同僚だよ。先週、告白した」

「相手も大学生？」

「うん。大学三年生だからひとつ上だな。というか落ち着けよ。水でも飲め」
水の入ったコップを「ほれ」と差し出される。

僕はコップを受け取り、水を一口飲んだ。

鞆からポケットティッシュを取り出し、鼻に入った麵を出すため鼻をかむ。
すつきりしてからコップの水を飲み干した。

「いやーびっくりした。全然そんな気配がなかったから」

「バイト入ってすぐのころから、よく話をしたりしてたんだ。最近は何りにご飯食べに行ったりもしてさ。彼氏いないことは聞いてたから、先週、告白した。そしたら、OKもらえた」

「そうだったのか」

正直、古巣は僕と同じ、恋愛とか彼女とかとは無縁の人間かと思っていた。

僕と同じく恋愛経験がないということも聞いていたし。

それがこんなに早くリア充の仲間入りを果たそうとは。

「宇二はどうなの？ 星屋さんとは進展ないの？」

「えっ！ なんで！」

「いつも話してるとき、すごく楽しそうだったから。違った？」

「その『いいなあ』とは思ってるけど……」

最後の方は、何だか照れくさくて、ごにょごにょしてしまう。

「サークル以外でも、いくつか同じ授業を受けてるんですよ。そのとき話とかは？」

「話はしてるけど……」

「そうかー。そもそも彼氏いるのかな」

「どうなんだろう」

思い返すと、星屋との話題は、学校のことが多くてプライベートな話はあまりしていない。

「それにしても、何だか、古巣リア充としての余裕が出てきたな」

「いやあ、舞い上がってはいるけどね。まだまだだよ。デートで、どういふところに行ったら良いかよく分かんないし」

何だか、古巣が遠い世界の住人になってしまったようだった。

5

日曜日。僕がいる場所は、バイト先近くのショッピングモールのゲームセンター。

親子連れや若いカップル、中学生や高校生の集団など様々な人の姿がある。

今日は、僕一人ではなく、古巣と一緒に来ている。カラオケのUFOキヤッチャー以来、僕ほどではないが、古巣もハマっているようだ。

「若いカップルもあるね。古巣、今日はデートじゃなくて良かったのかい？」

「今日は向こうが家の用事あるって言ってたし。バイト先でいつも会ってるから大丈夫。メールとか電話でもやり取りしてるしさ」

くそう、リア充古巣め。なんて、余裕の発言なんだ。

二人で台を物色していると、以前取れなかったライオンのぬいぐるみを見つけた。

「あ、俺、ライオンに挑戦しようかな。前、取れなかったんだよね」
台には三匹のライオンが縦にきれいに並んでいる。店員が位置を直してからまだ誰もプレイしていないようだ。

百円玉を入れる。台からゲーム開始の音楽が流れ出す。

まずは前回同様に転がして取る方法を試みることにした。ライオンの位置は、足が取り出し口、頭が奥を向いている。

頭の位置にアームを合わせる。アームが開き下がっていく。ライオンの頭をつかむとそのまま上がっていく。でんぐり返しの要領で転がすつもりだ。しかし、ライオンが垂直に近くなったところで倒れてしまった。何もつかんでいないアームが元の位置に戻る。

「やっぱ転がして取るの難しいな」と古巣。

僕は意識をライオンのぬいぐるみに集中する。どう取るべきか。つかんでもダメ、転がしてもダメ……。

ライオンのお尻付近、商品情報が書いてあるタグに意識が向いた。タグは洋服のタグなどにも使われている透明な輪っかであつながつている。

僕は財布から百円玉を取り出し、台に投入する。

アームの右ひじを輪っかの位置に合わせる。先ほどのプレイでアームの開く範囲は把握している。ボタンから手を離すとアームが開き下がっていく。アームの右爪が輪っかの間を通っていく。閉じるアーム。輪っかはアームのひじ辺りにかかっている。上がっていくアーム。ライオンがお尻から持ち上げられていく。

輪っかは、ずり落ちひじから爪の真ん中へ。取り出し口へ動き出すアーム。ぬいぐるみは引っかかったままだ。アームは移動して取り出し口へ到着。開くアーム。輪っかはすべり、ぬいぐるみを取り出し口へ落ちた。

「おお！ ひっかけて取った」と古巣。

僕は取り出し口からライオンのぬいぐるみを取り出した。興奮で手は汗ばみ、少し震えている。

頭に付いたたてがみを触ると、思ったよりも柔らかくてふさふさしていた。

「もう一回だけ、やってみようかな」

今のワンプレイ、自分の中で何かをコツをつかんだ感覚があった。できれば忘れないように、今の感覚を体に沁みつけておきたい。

百円玉を投入する。

アームのひじを輪っかの位置に合わせる。アームは輪っかを捉え、そのまま取り出し口へ。

「また取った！ 連続じゃん」と古巣は少し興奮気味に言った。

残ったひとつも練習で取りたいところだが、必要以上に商品を取るのにはマナー違反のような気がした。それに、今の二回で感覚はつかめた。

「ひとつ、良かったら上げるよ」

僕はライオンのぬいぐるみを差し出す。ひとつは自分の記念に取っておきたいが、同じぬいぐるみがふたつもいらぬい。

「マジで？ サンキュー。それにしても、覚醒したな宇二」

「コツつかんだかも」

近くにあるラックからゲームセンターのロゴが入ったビニール袋をひとつ取りライオンのぬいぐるみを入れた。古巣もビニール袋にライオンのぬいぐるみを入れた。

「俺も何か取りたくなってきたな。どれにしよう」と周りを見渡す古巣。

ライオンのぬいぐるみの台を離れて、僕たちは新しい台を探し始める。

「あれ？ 古巣君と宇二君？」

聞き覚えのある声があったので目を向けると星屋の姿があった。そして、その隣にいたのは――。

「須平先輩？」

そこにはバイト先の須平先輩の姿があった。

「宇二君じゃん！ 偶然！ 朱里、宇二君と知り合いだったの？」

「うん、同じ大学だよ。それで、同じサークルなの。光也も宇二君のこと知ってるの？」

「バイト先で一緒なんだ。UF〇キャッチャーのコツを教えてくれたの宇二君だよ」

「そうだったの？ そしたら宇二君にお礼言わなきゃ。見て！ 光也が欲しかった手帳を取ってくれたの」

山中さんの手には箱に入った世界的に有名なキャラクターの手帳があった。

「今までつかんで取ろうとしてただけ全然取れなくてさ。宇二君の言うとおりに、少しずつ取らしたら取れたよ。慣れてないから、けっこうお金かかったけどね」

「でも、この手帳欲しかったから、うれしい」

星屋は、きらきらした目で言った。

僕は、内心の動揺を持てる限りの精神力で抑え、できるだけ笑顔で対応する。ただ、頬のあたりが、ちよつと引きつっているかもしれない。

「ホント、サンキューな」と須平先輩。

「あ、いえ」

僕は、声を絞り出す。声を出すことってこんなに大変だったっけ。

「さて、目当ての物も取れたし、朱里、飯でも食べに行こう」

「そうだね。二人ともまたね」

星屋は、僕たちに手を振ってゲームセンターを離れていく。その隣で、僕たちに向かって軽く手を上げる須平先輩。

二人はそのまま下りのエスカレーターに乗って見えなくなっていった。

隣にいる古巣を見ると、何とも言えない渋い表情をしていた。

「あー……何というか。どっか飲みにも行く？ 今日は気の済むまで付き合うからさ」

「いや、まあ、うん……ありがとう……」

古巣の優しさが、ひび割れた皮膚に水がしみたときのように痛い。

涙は出ないが、眼球の表面の水分が少しだけ増えたような気がする。どうしてか、瞬きが増える。

日曜日の昼間から何とも言えない気持ちだ。

くそお……がんばれ俺！